

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12530

研究課題名（和文）社会デザインと批判デザインとの相互関係をめぐる歴史的展望

研究課題名（英文）Historical Perspectives on the Interrelationship between Social Design and Critical Design

研究代表者

高安 啓介（Takayasu, Keisuke）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：70346659

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：非商業系デザインのうちには二系列の取り組みがあった。社会デザインが、人々がいま直面する問題の解決を目指すのなら、批判デザインは、差し迫った問題解決をいったん保留して、何が本当に問題なのかを問うたり、思っても見なかった可能性を示唆したりと、アートに近い試みとして知られる。両者ともに関心をもたれているが、各々の歴史はあまり省みられることはなく、両者は一対をなす仕事であるにもかかわらず、両者の関係は深く問われなかった。本研究は、歴史資料にもとづき、非商業系デザインの二系列の歴史について比較をおこない、デザインに要求される問題解決のありかたを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一方において、社会デザインへの高い関心があり、他方において、批判デザインやそれに類するアートが試みられてきたが、両者の関係を問う試みはほとんどなく、二つのカテゴリーは混同される場合もある。そこで、両者を区別して各々の歴史を描いて比較すれば、今日いわれる「問題解決」がいかに時代に条件づけられているか分かるようになる。たしかに、二つのいずれか区別できない事例もあるが、両者を区別するからこそ、両者の中間にあるような試みを評価できるようになる。本研究はそうした中間の試みを、思弁的（スペキュラティブな）社会デザインと呼んで、見えにくい傾向を浮き彫りにする。

研究成果の概要（英文）：Non-commercial design involves two types: social design and critical design.

While social design aims to solve the problems that people are facing today, critical design is known as an artistic experiment that asks what is really the problem, or suggests unexpected possibilities, suspending the solution of the immediate problem for a moment. Although both have been the subject of much interest, the history of each has not been well studied, and the relationship between the two has not been deeply questioned, despite that they are a pair of works. Based on historical data, this study compares the histories of those two lines of non-commercial design and examines the nature of problem-solving required of design.

研究分野：Design Studies

キーワード：social design critical design speculative design design history problem-solving

1. 研究開始当初の背景

社会デザインすなわちソーシャルデザインの多くの事例が、書籍・論文・展示により紹介されてきた。何か仕事を起こすとき、過去の事例は大いに参考になるが、事例が積み重なって多様になるにつれ、関心の変遷をとらえ、事例の性質を見極めるため、社会デザインの歴史についての知見がもとめられている。けれども、事例の紹介ほどには、歴史への関心は高くなく、実践にもとづく理論はあっても、歴史にもとづく理論はない。ものを作る仕事がますます本業でなくなり、社会の仕組みづくりが中心となるならば、事例の記録保存のためにも、社会デザインの歴史が書かれる必要があった。

批判デザインすなわちクリティカルデザインや、思弁デザインすなわちスペキュラティブデザインとよばれる取り組みも注目されてきた。目先の必要への集中が、柔軟な考えを妨げる可能性もあるため、問題解決にとらわれず、本当の問題を明らかにしようとしたり、誰も考えないようなことを考えたりするのも大事である。この考えは、ダン&レイビーによって提唱され、日本でもデザイン教育に取り込もうとする機運が高まっているが、批判デザインの歴史もまだ十分に書かれておらず、思弁デザインにおいて問われる未来がどのような種類の未来かについてまだ議論の余地があると思われた。

2. 研究の目的

社会デザインは問題解決に向けた取り組みであり、批判デザインないし思弁デザインは問題提起にかかわる取り組みである。そこで、両者の違いをいったん明確にして、両者の歴史をとらえたうえで、両者の交わるポイントを明らかにする。

3. 研究の方法

社会デザインは、近年その呼び名によってデザインの仕事として認知されているが、19世紀以来の前史はなかなか議論されにくかった。そこで、社会デザイン大まかな展開を、三つの段階からとらえるモデルを検証する。一段階目は、労働のありかたを見直して、美しいものを生み出そうとする段階であり、社会に配慮しようとする段階である。二段階目は、消費のありかたを見直して、必要なものを生み出そうとする段階であり、社会に貢献しようとする段階である。三段階目は、生活のありかたを見直して、人と人との関係を生み出そうとする段階であり、社会を創造しようとする段階である。

思弁デザインの仕事がいかなる未来にかかわるのかを問い直して、予想の未来でもない、理想の未来でもない、仮想の未来というべき未来を描くことの意味について考える。ここでいう仮想の未来とは、思いもかけない未来であり、他でもありうる未来であり、起こるのか起こらないのか予想もつかず、良いことか良くないのか評価のさだまらない未来である。それはいわば、未来について考えるきっかけとなる未来である。たとえば、SFに描かれてきた奇想天外であるが一定の説得力のある未来はこれである。社会変革に向けたデザインにおいて、仮想の未来というべき未来を描くことの必要について考察する。

4 . 研究成果

社会デザインの歴史は、問題の積み重なってきた歴史であり、経験の積み重なってきた歴史である。社会デザインの三段階モデルは、一つの段階のあとに次の段階が始まるという継起モデルではなく、一つの段階のうえに次の段階が重なるという蓄積モデルである。労働のありかたを見直して、美しいものを生み出そうとする段階はまだ終わっておらず、消費のありかたを見直して、必要なものを生み出そうとする段階はまさに、今日のデザインの主要な関心だと言える。反対に、社会のありかたを見直して、人と人との関係を生み出す仕事は、以前はデザイナーの仕事とみなされてなかっただけで、今日になってデザイナーの仕事として自覚されるようになったに過ぎない。しかしそれでも、歴史を通じての社会デザインの力点の変化は見られる。すなわち、デザインの主要な対象が、美的なものから必要なものへ、製品から人と人との関係へと移り変わってきた点である。ここで一つの問題が浮かび上がる。それは、デザインの「美学」は不要なのか、仕事の「美しさ」は問われないのかという問題である。

ユートピア概念について検討をおこない、人間中心主義、技術中心主義、環境中心主義、の3つの組み合わせによって、合計7種類のユートピア(ディストピア)の類型を得て、未来についての考えを整理する見通しを得た。加えて、思弁デザインおよび未来の概念についての検討をとおして、二重のバックキャストに考えがおよんだ。バックキャストとは、未来について考える一種の方法で、理想の状態をまず定義してから、現在に向かって逆方向にそこにいたる行程を考えていくやりかたであるが、目標がもし平凡ならば、取り組みも平凡になるし、目標にもし問題があるならば、取り組みにも問題があるだろう。そこで、二重のバックキャストが必要とみられる。すなわち、理想の未来をとおして予想の未来をとらえかえず「逆照射」にたいして、仮想の未来をとおして理想の未来をとらえかえず「逆照射」が必要であろう。それは、思いきった提案をめぐって議論をおこない、実現可能かつ受け入れ可能なところまで引き寄せるような作業である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

| | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 Keisuke Takayasu, Christof Breidenich, Nicole Christ | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 MUJI and the Aesthetics of Simplicity: A Comparative Study on Minimalist Product Images | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory | 6. 最初と最後の頁 154-163 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/91150 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 高安啓介 | 4. 巻 67 |
| 2. 論文標題 思弁デザインはいかなる未来を描くのか | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 日本デザイン学会研究発表大会概要集 | 6. 最初と最後の頁 352-353 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|-------------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 高安啓介 | 4. 巻 76 |
| 2. 論文標題 良いデザインと評価の問題 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 デザイン理論 | 6. 最初と最後の頁 115-129 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/76929 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名 高安啓介 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 社会デザインの三つの段階 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 ata 美学研究 | 6. 最初と最後の頁 90-119 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 高安啓介 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 他にもありうる未来ーデザインの想像力によせて | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 a+a 美学研究 | 6. 最初と最後の頁 10-29 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

[学会発表] 計5件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

| |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Keisuke Takayasu, Christof Breidenich, Nicole Christ |
| 2. 発表標題 MUJI and the Aesthetics of Simplicity: A Comparative Study on Minimalist Product Images |
| 3. 学会等名 4th Asian Conference of Design History and Theory (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------------------|
| 1. 発表者名 高安啓介 |
| 2. 発表標題 思弁デザインはいかなる未来を描くのか 未来の分類による省察 |
| 3. 学会等名 日本デザイン学会 第67回春季研究発表大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 高安啓介 |
| 2. 発表標題 製品デザインにおける徳の美学 |
| 3. 学会等名 美学会西部会 第330回研究発表会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 高安啓介 |
| 2. 発表標題 社会デザインの起点としてのモリスの労働観 |
| 3. 学会等名 第7回 ウィリアム・モリス研究会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 Keisuke Takayasu |
| 2. 発表標題 Design History in the Transcultural Context |
| 3. 学会等名 Euroculture Lecture at the University of Goettingen / University of Groningen (招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
| | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |